

氏 名 伊原 小百合
ヨ ミ ガ ナ イハラ サユリ
学位の種類 博士(学術)
学位記番号 博音第313号
学位授与年月日 平成30年9月30日
学位論文等題目 〈論文〉
幼児期における探索的経験の意義
—楽器とかかわる幼児の縦断的観察—

論文等審査委員

主査	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	佐野 靖
副査	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	山下 薫子
副査	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	塚原 康子
副査	聖心女子大学	教授		今川 恭子

(論文内容の要旨)

本研究は、楽器と探索的にかかわる幼児の行為を縦断的に観察することを通じ、探索的な経験の意義を音楽教育学的観点から明らかにするものである。

乳幼児期には主体的に環境を探索することが尊重され、その重要性については保育や教育に携わる者が経験的に認識してきた。近年では音楽教育を取り巻く隣接諸科学においても、探索的な経験の重要性が科学的に実証されつつある。特に 20 世紀後半以降、抽象的な記号処理能力としての知能の解明に限界が叫ばれるようになり、身体性に基づくアプローチへの転換が起こるようになると、発達を取り巻く分野においても要素還元主義を批判的に捉え、環境を視点の一つとして取り入れる発達観が提示されるようになり、人の行為を解明するための手がかりとなる知見が多く示されてきた。本研究はそうした近年の発達観を音楽教育学から捉え直し、幼児期における探索的経験の意義を実証しようとするものである。

音楽教育においてはこれまで、幼児が環境にある音に耳を傾けたり、身近なモノとかかわりながら音を出したり聴いたりすることを通じて、音に関する経験を深めることの重要性が示されてきた。本研究では、幼児の身近な環境の中にあり、幼児自身がかかわりをもつ機会の多いモノの一つである楽器に着目した。楽器は多くの保育現場で用いられているが、演奏の上達を目指した指導が多く見られる一方で、「子どもが自由に楽器に触れられるように」という目的ではあるものの、適切な音環境への配慮に欠けた置かれ方をしている光景を見ることも多い。つまり楽器の扱いにおいては、幼児教育にて尊重される「主体的な探索」を担保するための環境構成が実現できていない現状がある。一方、楽器とかかわる幼児について検討した先行研究は、いずれも幼児の音楽的な能力や技能面に着目しており、主体的な探索を担保する環境構成の中で楽器をどのように位置づけ、そこで何が育まれるかという観点からの研究は充分になされているとは言い難い。

そこで本研究は、幼児の音楽的な能力を測ろうとするのではなく、楽器を遊び道具の一つとして位置づけることで幼児の自由探索を促し、そこでの幼児のかかわり方を広く「探索的経験」と捉え、そうした経験を通して何が育まれるのかを縦断的に検討する。本研究の意義は、音の出るモノとかかわる経験と幼児の学びとの結びつきを連続的に見つめる新たな視点を提示し、そうした視点から幼児の学びを読み解くところにある。

まず第 1 章では、発達に関する隣接諸科学の研究動向を概観し、音楽教育学における乳幼児研究との関連について考察した。本稿ではアフォーダンス、DSA、タウ理論の 3 つを取り上げた。アフォーダンスは環境という概念のパラダイム転換、DSA は行為を縦断的に分析することの重要性や行為の多要因性、タウ理論は行為を環境と一体に捉えることの妥当性を説いている。こうした近年の研究動向を踏まえ、環境との相互作用的視点を担保し、楽器を遊び道具の一つと位置づけて環境構成を行い、楽器とかかわる幼児の行為を広く「探索的経験」と捉えることとした。

第 2 章では、幼稚園での自由遊びの時間に楽器とかかわる幼児の行為を縦断的に観察し、対象児 2 名(男児 A・女児 B)の行為の様子や変容について、事例を挙げながら定性的に検討した。男児 A は、長い時間をかけて楽器というモノと向き合う中で、楽器に対して次第に積極的な姿勢を見せ、音の違いを認識したり、自分なりの遊びの中で楽器を用いたりしながら楽器を身近なモノにしていた。女児 B は、早期から音を楽しむモノとして積極的に楽器とかかわる様子が見られ、音の違いにも早くから気がついており、楽器を介した他者とのやり取りが多かった。

第 3 章では「ジャンベを手で叩く」という特定の行為に焦点化し、対象児の行為を分析した。観察記録から「ジャンベを手で叩く」場面を抜き出し、各場面について、ジャンベとの位置関係、手の動き、叩く行為の発現回数、音の響きの 4 点から検討した。男児 A の分析では、男児 A が身体的にも心理的にもジャンベとの距離を縮め、楽器との関係を次第に安定させていく様子が確認され、また「聴く」ことが叩く行為に関連している可能性が示唆された。女児 B においては、早い段階から楽器との関係が安定しているように見えたものの、手の動きに細やかな変化が起きており、次第に叩き方が洗練されていたことや、他者の存在が行為を継続するための要因となっていることが分かった。

本研究の結果から、幼児が探索的に楽器とかかわることの意義は以下の 3 点にまとめられる。すなわち (1) 楽器を身近なモノにすること、(2) 楽器と安定した関係を構築すること、(3) 「聴く」と関連しながら音への関心を育むことである。幼児期の探索によって育まれるこうした学びは、音楽的な学習においても不可欠なものであり、この結果は楽器を探索することが音楽学習の根幹を支えるものとなり得ることを示している。本研究は、探索的な経験と幼児の学びとの結びつきを連続的に見つめる視点に立つことで、音楽学習の萌芽とも言うべき幼児期の学びを発見し、探索的経験の意義を実証した。

(総合審査結果の要旨)

本論文は、幼児の身近な環境の中にあり、幼児がかかわりをもつ機会の多いモノのひとつである楽器に着目し、楽器と探索的にかかわる幼児の行為を縦断的に観察、分析することを通して、幼児の探索的行為の意義を明らかにしようとするものである。

まず第1章では、発達や身体性に関する隣接諸科学の研究動向、具体的には、アフォーダンス、ダイナミック・システムズ・アプローチ(DSA)、タウ理論という3つの研究動向を踏まえ、それらを音楽教育学的に捉え直し、リサーチクエストや新たな研究の視点を提示した。続く第2章では、幼稚園での自由遊びの時間に楽器とかかわる幼児の行為を縦断的に観察し、対象児2名の行為の様子や変容について、事例を挙げつつ定性的な検討を行った、さらに第3章では、「ジャンベを手で叩く」という特定の行為に焦点化し、ジャンベとの位置関係、手の動き、叩く行為の発現回数、音の響きの4点から対象児の行為を分析した。結果、幼児が探索的に楽器とかかわることの意義として、①楽器を身近なモノにすること、②楽器と安定した関係を構築すること、③「聴く」と関連しながら音への関心を育むこと、という3点を提示し、音楽学習の萌芽とも言うべき音楽の学びにつながる探索的経験の意義を実証した。

本論文を評価できる点として、まず、研究の着眼点が挙げられる。従来、幼児の音楽教育研究分野においては、音楽的な能力や技能面、教授法やカリキュラム開発といった観点からの研究が多い。反面、環境構成とのかかわりから探索的経験の意義や価値を明らかにしようとする研究はきわめて少ない。その意味で、発達や身体性に関する研究動向を踏まえた本論文の着眼点には新奇性がある。また、音の響きのみならず、身体の動きそのものに着目した点も独創的である。

さらに、長期にわたってフィールドワークを継続し、その観察結果をていねいに分析、検討している研究の方法・手続きについても高く評価できる。幼児の姿が生き生きと描かれた行動資料に基づく本論文は、実証的な研究のひとつのモデルとなる可能性をもっている。

ただし、解決しなければならない課題も残されている。300頁以上の膨大な資料に比較すれば、理論構築や結論の部分はまだ十分とは言えない。事例分析から抽象化に向け、より掘り下げた考察と記述が求められる。研究動向として取り上げた新しい理論枠組みと観察の分析結果との関係性についての記述も不十分と言わざるを得ない。音楽的能力などの用語の概念規定、観察対象となった幼児を選択した理由に関しても、もう少し詳細な記述が必要である。

とは言え、これまで音楽教育学分野においてほとんど取り上げられなかった幼児の探索的行為に焦点化し、縦断的な観察を通してその意義を明らかにしようとした本論文は、幼児の身体性や音楽的な学びに着目した貴重な基礎研究と位置付けられる。課程博士の学位取得にふさわしい内容をもつものと評価し、合格とする。